



若者よ! 世界にでよう!

ドイツ日記

～その5: ドイツ人の不満～

ドイツ連邦
物理工学研究所
山口敦史
Atsushi Yamaguchi

ドイツ人の不満の特徴

1

今回は、ドイツ人の不満を通して、ドイツについていろいろと考えてみたいと思います。私がドイツで生活を始めてちょうど1年になりますが、ドイツで耳にする不満は、日本の不満とは少し違う特徴があると感じています。中でも特に大きな違いだと思う点は二つあります。一つは、そもそも不満を言う頻度が低いという点、もう一つは、不満を言うときに、不満に加えてそれを解決する理想像が伴っている場合が多い、という点です。以下、この2点について考えてみたいと思います。

ドイツ社会にあふれる余裕

2

まず一つ目の特徴、不満の頻度についてです。人が集まると、多かれ少なかれ不満を言う人は必ずいるものです。しかし私が体験した限り、ドイツでは日常会話に出てくる不満の頻度がとても低い印象を受けます。コーヒータムの会話でも、食事時の会話でも、皆とても大らかで落ち着いていて、不満を言っている人はあまり見掛けません。これはドイツ生活全般に対してもいえることです。ドイツで生活していると、ドイツ人が何とも形容のし難い、圧倒的な気持ちの余裕を持っているように感じるがよくあります。

身近な例として、役所で手続きをしているとき、運悪くその場で煩雑な書類に記入しなければならず、後ろの人を待たせることになってしまった、という状況を考えてみます。日本でそのような場面になると、私は、後ろで待たせている人の刺さるような視線(すなわち不満)を痛ほど感じ、焦ってしまって気もそぞろでした。しかしドイツでは、後ろの人は全く嫌な顔もせず実にのんびりと待ってくれます。そのため、何も気にせずに自分のペースで落ち着いて作業ができるのです。もちろん、ダラダラと意図的に時間を掛けるのは問題です。しかし、やるべき作業を正當にやっているだけなら、例えそれに

時間が掛かるとしても、それは正當な時間の掛け方なので、それを責める理由は何もないのです。それに、待たされるといっても、まさか明日の朝まで待たされるわけでもありません。そんなときは、後ろの人はのんびり待ってあげればよいということなのでしょう。ドイツで生活していると、そういった気持ちの余裕であふれている感覚を、随所でひしひしと感じます。

では、このドイツ社会にあふれる余裕というのはいったいどこから来ているのでしょうか。一つの要因は、皆しっかりと休みを取るとい点ではないかと思います。平日は、終電間際まで仕事をするなどということはまずあり得ませんし、日曜日には絶対と言ってもよいほど働きません。あったとしても1年に1回ぐらいでしょう。夏休み・クリスマス休暇・イースター休暇、それぞれで最低でも2週間は休みます。そんなことをしたら仕事が停滞してしまうのでは、と心配になりますが、その間例えば、時期をずらして休暇を取る他の人がカバーするといった万全のバックアップ体制が組まれているので、本人は思う存分休めるのです。この休み方に慣れていなかった私は、ドイツに来た当初、こんなに休んで良いのだろうか、と得体の知れない罪の意識を感じながら休日を過ごすことがよくありました。しかし、実際ドイツで1年過ごした今では、以前よりも物事をじっくりと落ち着いて考えられるようになり、個人的にはこちらのスタイルも気に入っています。そして、この生活スタイルなら、細かいことにあれこれ不満を抱くことも少なくなるだろうと、容易に想像ができます。

もう一つのドイツ人の余裕の源、それはドイツの安定な自然環境だと思います。ドイツには、大きな自然災害というもの何一つありません。地震もない、火山もない、台風もない、何一つありません。国土が北海道よりも更に北に位置することもあり、夏に猛暑になることもありません。冬は確かに寒いですが、家が埋まるほど猛烈に雪が降るといったことはありませんし、暖房設備が完備されているので、室内にいれば全く問題ありません。つま

り、自然災害という観点から見ると、ドイツは驚異的に安全な国なのです。とりわけ、日本からドイツに引っ越してきた私などは、ドイツ国土の安定感をひしひしと実感しています。そしてこの安定感は、多かれ少なかれ、ドイツ人の精神的な部分にも安定感をもたらし、結果としてこの何ともいえない社会にあふれる圧倒的な余裕をもたらす一因になっているに違いないと思います。

理想像のある不満

3

さて、頻度は低いとはいえ、ドイツでももちろん不満を聞くことはあります。しかしドイツで聞く不満は一味違うように感じます。それはドイツ人が不満を言う際、不満だけでなく、それを解決する理想像も熱く語る人が多いからです。

例えば、「今の政府はもうだめだ」とか「今の首相はもうだめだ」などは、ドイツでもポピュラーな不満です。私はこの手の不満に対しては、なぜその人が不満なのかという点にはあまり興味はありません。むしろ、その人の理想像、つまり「それなら、どうなったらあなたの理想なのか？」という点に興味があります。それは、その理想像にこそ、その人独自の個性が垣間見えるからです。そこで、例えば上述の不満を聞くと、「あなたが今の政府に不満なのは分かりました。では、あなたの理想の政府は、具体的に何がどのようになっている政府ですか？」とか「では首相は誰が理想で、その人にやってもらいたい理想の政策を具体的に教えて下さい。」と聞きたくなのです。もっとも、いちいちそこまで考えて不満を言っている人は少なく、こんな質問をすると変わった人だと思われるのは目に見えているので、日本で他人に対してここまで聞くことはほとんどありませんでした。

しかし、ドイツではこの理想像が返ってくるのです。上のような返答をすると、待っていましたとばかりに、幾らでも具体的な理想像が出てきます。上では政治の話を挙げましたが、日常生活でもこの「理想像のある不満」は、至る所で体験できます。例えば自分が「最近、ガソリンの値段が高すぎる！」と不満を言って、相手に「それなら、幾らがあなたの理想なのか？」と聞かれたとします。普通はせいぜい「そんなこと言われたって、それは安ければ安いほどいいんだよ…」といった曖昧な答えをしてしまうことが多い気がします。しかし先日、ドイツ人の友人数人とガソリンスタンドに行ったとき、彼らが

「ガソリンが高い」と言うので、理想の値段を聞いてみたら、「例えば、セルフスタンドで立っているだけで何もしていないあの従業員を解雇すれば、その分でリッター当たり、あと何セントは安くなるはずだ。」「いや、あれはあれである程度の雇用を生み出しているのが重要だ。だから削るのは反対だ。それよりも、夜でも煌々とつけているあの明るい照明は無駄だ。あれを削れば何セントは安くできる。」となり、挙げ句の果ては中東の政治情勢の話にまで発展しそうな勢いです。ガソリンの具体的な値段を理想像というのは少し大げさすぎるかもしれませんが、しかしやはり具体的な目標数値を想定して不満を言っているのです。

そして「理想像を持って不満を言う」と、このように引き続いて激しい議論の応酬を伴うことが多いのです。それは、不満を言った本人は自分のお気に入りの理想像を主張しますが、別の人はまた別の理想像を持っていることが多く、それぞれ自説を補強する例を何種類も用意し、予想される反論に対して反撃できるように理論武装しているからです。これはまさにディベートの技術そのものです。そして、このようなやり取りを小さい頃からいろいろなトピックスで日常的に繰り返していることは、彼らが学問の分野でも往々にして議論に強い理由の一つではないかとも思うのです。

不満というと何となくマイナスのイメージがありますが、この例からも分かるように、むしろ理想像の方が本当に言いたいことなので、ドイツ人たちは不満よりもそれに続く議論を楽しんでいるように見えます。私は基本的に他人の不満を聞くのはあまり好きではありませんでしたが、今はどう理想像を用意しようかと頭の体操をしているような気分になるので、不満に続く議論がむしろ楽しみになっています。

最後に

4

今回は、私のドイツ生活の体験をもとに、不満という視点からドイツについていろいろと考えてみました。ただ、私のドイツでの会話の相手は、仕事相手か日々の買い物で接する人々に限られています。もし機会があれば、全く違う仕事の人、小・中学生などの若い人、そしてお年寄りなど、いろいろな人の不満とその理想像もそのうち聞いてみたいと思っています。